

縄文文化の研究成果

尖石考古館 茅野市の若手職員が発



茅野市尖石縄文考古館は26日、市の20代の若手職員3人が縄文時代の文化に関し、学生時代から現在まで取り組む研究の成果をそれぞれ発表する「今、私たちはこういう調査・研究をしています」の初回を同館で行った。市教育委員会文化財課文化財係の吉村璃来さん(27)が縄文後期の葬式や墓について講演。約40人が来場して吉村さんの話に耳を傾けた。

八ヶ岳山麓で縄文中期に栄えた遺跡が、後期になると激減した理由に興味を持って調査、研究している吉村さん。発表は「縄文時代後期における葬式制の複雑化―鉢被せ

葬」と「仮面の女神」と題して行った。葬式制は葬式や墓を作るときを決まりで、葬式制を研究することで文化を共有する集団の死生観や動きが見えてくると説明した。縄文後期には儀礼祭祀が複雑化し、祭祀や葬式制が発達したと紹介。その要因として二つが考えられているとし、寒冷化に伴う環境の悪化に呪術的な手法に頼って対応しようとしたという縄文文化の停滞論と、停滞、衰退ではなく縄文人が知恵を尽くして環境の変化に適応しようとした結果ではないかとの考えがあることを解説した。第2回は8月30日で、市商

係の上野楓さん(22)が話す。問い合わせは同館(電話0266・76・2270)へ。

(手塚洋一)